

## 奥宮慥齋日記——明治時代の部(四)——

島 善 高

### 解題

本号には、奥宮慥齋日記の明治四年一月一日条から十二月三十一日条までと、参考史料一点「諭俗人間靈魂自由権利訳述」とを翻刻した。それぞれの所蔵番号は次の通りである。

①「備忘日録」(高知市民図書館蔵「奥宮文庫」受入番号七―四九)の明治四年度分全部

②参考史料、「諭俗人間靈魂自由権利訳述」(明治四年三月八日)(高知市民図書館蔵「奥宮文庫」受入番号四―五三)

明治三年十二月十五日以来、高知藩の「第五等官大属」に任じられていた慥齋は、明治四年正月六日に「学校大属」に任じられ、二月二十七日には「戸籍社寺係」に転じ、五月二十七日には「異宗教諭」係となったが、八月二十四日には再び「戸籍社寺係」を担当す

ることになった。当日の日記に「諭俗兼命」と書いているので、「諭俗司」の職はそのままであった。その後、九月十四日にまた「学校改革之事」を兼ねるようになった。そして十月十四日には、「第六等官大属」を免じられ、「管録」も除かれた。その後、慥齋は明治五年正月に至るまで、公職には就いていない(明治三年には「五等官」であったのが、ここでは何故に「六等官」となっているのか、その理由は不明である)。

明治四年中に慥齋が残した足跡は数多いが、その第一に挙げなければならぬのは、三月十四日から四月八日まで、山田・立田・赤岡・夜須・和食・安芸・安田・田野浦・奈半利・葦生野・大栃など、主として高知の東南部を巡歴し、郷長・村老・惣組頭・神官などを集めて、「諭告」大意や「身滌祓除」を説いて回ったことである。この「諭告」は前号で紹介した「夫レ人間八天地間活動物ノ最モ

貴重ナルモノニシテ」云々で始まる文章であり、「身滌祓除」も前号で紹介したように、慥齋が起草した「皇朝身滌祓除」を指す。両者とも、慥齋が渾身の力を振り絞って書いたものであって、これらを基に慥齋は、「人民平均の理」や「自主自由の権」を説明し、また改過自新の大切さを説いたものと思われる。毎回、十名から七十名程の聴講者があったと記しているが、既に慥齋は、明治二年三月十日から四月十七日にかけて高知の西部地方を巡歴しているのである（鳥善高「奥宮慥齋日記―明治時代の部―（二）」『早稲田社会科学総合研究』第一〇巻第一号参照）、慥齋の考えは高知全体に広まったと看做してよい。高知の山間僻地に至るまで自由意識、権利意識が広がったのは、慥齋の尽力に依ると言っても間違いはない。

なお、慥齋が熱心に起草し、高知藩でも採用された「身滌規則」は、四月二十三日に廃止された。その経緯は不明であるが、慥齋は余程、落胆したものと見えて、当日の日記に「是日祓除被廢、余長大息」と書き留めている。

第二は、「異宗教諭」である。この件については、片岡弥吉「中野健明の高知巡視と奥宮慥齋のキリシタン教諭について」（キリシタン文化研究会編『キリシタン研究』第五輯、昭和三十四年、吉川弘文館）という先行研究があつて、委細を尽くしている。今、この研究によって概略を紹介すれば、明治初年、長崎の浦上キリシタンのうち百十六名が高知に移送され、赤岡牢や江ノ口牢に収監されていたが、明治四年四月十八日、及び二十八日には陽貴山見竜院の廃寺に移された（この間、三十五名病死）。日本各地に預けられていたキリシタンが

虐待を受けていると外国からの抗議を受けた明治政府は、巡察官を派遣することにし、高知には外務権大丞中野健明がやってきた。中野は五月二十五日に高知に到着し、異教徒を教誨して改心させるようにと具体的な指示を出した。これによって高知藩権少参事岩崎二三、大属奥宮慥齋、権少属宮地厳夫、史生吉川富七郎、番卒十四名が「取扱御用懸」となった。かくて慥齋は、明治四年六月、キリシタン教諭のために「異宗教諭大意」を執筆した（高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号六一五、六、七。片岡弥吉論文に全文翻刻あり）。慥齋日記の五月十三日条から八月十三日条までにたびたび見える「陽山」「陽貴山」とはキリシタンを収監していた場所であり、「諭異教徒」の内容が、すなわち「異宗教諭大意」であった。

第三は、高知県の学校改革に従事したことである。この件については杉山剛「明治四年における高知県の学校改革―奥宮慥齋と小林雄七郎の議論をめぐって―」（『社会学論集』第十五卷、二〇一〇年三月）が詳しいが、同論文によれば、明治三年十月、高知藩の藩校致道館では新たな規則を制定して洋学を取り入れることにし、明治四年正月には「翻訳書教場」を設置して西洋各国の書を授けることにした。そのために明治四年四月五日、慶応義塾出身の小林雄七郎を教師として採用した。さらに高知藩では小学校を設置することにしたが、この間、学校掛となっていた奥宮慥齋と小林雄七郎とはカリキュラム内容について意見を戦わせた。その際の一端を示しているのが「縣学議案」（高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号五一六、三一六二）であつて、洋学を重視する小林と、伝統的学問である漢学や皇学を

重視する慥齋とのやりとりが興味深い。結局、小学校のカリキュラムでは洋学は殆んど採用せず、慥齋の案に近かったが、明治四年十二月二十七日、致道館自体が一旦閉校となり、翌年二月、大規模な規則改正を行なって、洋学を大幅に取り入れることになった。

第四は、慥齋が私塾「陽山義塾」を開き、生徒数十人に教えていることである。慥齋の日記によれば、「被滌規則」、「大校詞」、「鹿洞揭示」、「靈魂且自由権二義」などを講じていたことが知られるが、「鹿洞揭示」とは、朱子の教えを初学者にわかりやすく書いた「白鹿洞書院揭示」であり、「靈魂且自由権二義」とは、参考史料として本稿末尾に掲げた「喻俗人間靈魂自由権利訳述」である。明治四年三月八日に執筆した「喻俗人間靈魂自由権利訳述」は、人間には本来平等に自主自由の権が備わっていることを事例を挙げながら懇切丁寧に説いたものであり、この当時の慥齋の思想を窺う格好の史料であると同時に、高知に自由民権思想が広まる最初期の文献として貴重である。

そして最後に、日記の十二月十七日に、「人間交際往来」と題する一冊を起草した記事のあること、これである。本書は高知市民図書館「奥宮文庫」に数種の草稿が残っている（受入番号二二・二五、二一五六、二一九〇、六一五四、六一八八）が、これまで紹介した「人民平均の理」、「諭告」、「喻俗人間靈魂自由権利訳述」などを集大成したもので、墨付全四十八葉からなっている。聊か分量が多いので、いずれ別途機を見て翻刻紹介することにした。

（明治四年正月）

辛未<sup>明治四年</sup>

元旦、晴、微雪、寒威殊甚、擁炉不出、塾生小畑生見示歌、余乃賡之

幽冥

ほめそしり得もうするも敷島の やまと心のみかきとそなる

鶯

朝戸出に聞そ嬉しき鶯の ねくらからなの春の初聲

二日、晴、寒<sup>五</sup>、晏起、讀黒住宗忠翁傳有感、其書曰道塵

玉銚の道の塵<sup>ホコリ</sup>にましりてそ 神のこゝろのうちもしらる、

晩命和歌題塾生

三日、晴、寒無事、浴後看書

四日、晴、諸生来る、命飲

五日、晴、初出官、宿江口

六日、晴、無事、有官事、更命学校大屬、西尾生来

七日、晴、休暇

八日、晴、出官

十九日 晴、出官

九日、夜来雨、告疾、帰布山

廿日、早起出官、途訪大久保参議旅寓、談話移晷、是日、他藩客等、会官衙中、余奉命将撰神葬式

十日、新晴

念一、是日無休暇、余以有所撰、賜告在布山

十一日、晴、朝咯血二三口、被衾保護、高橋淺川二生見訪、談陽貴山廃寺為義塾之事

送利岡生知金川縣

打烟る春の海原遠くとも 慕ふ夢路ハ近しとをしれ

十二日、寒、養痾不出、夜弘田生急書来、云祓滌稿可出

念二、雨、出官、与濱田生論神道、晚帰布山

十三日、晴、裁書付漾生、山本生来

念三、以疾賜告、帰隊布山

送板垣大参事適東京

十四日、晴、出官、無事

同しくハ君と御殿の山さくら 花ちらぬまに我も遊はむ

十五日、晴、賜休暇、以中元節也

整頓書籍以為慰、夜隣曲来、命飲話、更深後、乾生等醉客来訪、余方寝不遇

十六日、晴、出官

念四、微雨、今日亦休養

十七日、晴、出官、是日西方有名士七名来、云将之東京、迂途観藩

念五、晴、風

改革

十八日、晴、出官

念六、晴、暖、朝謙之出開成学、禮弟健吉等来、浅川森田濱田二三生来、云吉永良吉来自東京、夜無事、阿鶴之潮江

念七、雨、冒雨早出官、夜宿江口

来訪、命飲、見返書数部、濱中生亦来晤、夜雨甚豪、達曉洪水

念八、雨、出官、無事、訪伊藤生、与濱田生等飲、遂宿

七日、新晴、無事、猶不出

念九、晴、早訪吉永生托事、夜帰布山

八日、晴、暖甚、出府、退衙過潮江飲酒、帰過藤崎生又飲、遂酔宿、是日官秩拜稟

晦、晴、早出官、官脚来自東京、夜帰

九日、暖、朝出官、晚帰布山、西養次来、遊山

（明治四年二月）

浮世には住ともしらぬ我宿に 人来くと鶯のなく

二分

朔日、晴、風埃、肩痛、擁炉不出、田中生見訪、命飲、横川生亦来

十日

飲

十一日、柳川藩川田彦丸 神職、釵客

二日、晴、出官、召木村寿太郎於官中、聞宗忠社縁故、寿太備中人、大信宗忠社神道、是日日宮地生等亦来晤官中

十二日

三日、晴、出官無事、晚帰途觀陽山廢寺、鶴子亦帰自潮江

十三日

四日、微陰、暖、以齒痛休官、草布告文、付丸岡同僚

十四日、晴

五日、暖、養痾休暇、招飲於横川生、夜宮地生来晤、談神代事

十五日、訪市川子文、不在、取路于新地東郷、晚過介良、途与楠本生訪西養二、遂宿 酔眠到曉、雨聲滴々

六日、晴、長尾生見訪、是日休暇、雨終日、諸生許多見訪、山本生

十六日、暖、晏起、午前与西生觀花於舟岡、利岡楠本等五六人也、日

晡婦布山、俳人アリ、所謂付合ト云ラスル、其句ハ忘矣

十七日、陰、出官

きのふ朝夕花を見て

朝見ても夕へに見ても山桜 あかぬは花のいろ香なりけり

此條重出、可刪

英人タラス外一人暗殺ノ下手人斃人、肥後惣七同伴、佐土原二人ハ途中取後レ、刃傷ニ及ヒシ後、惣七ニ近付、其事ヲ聞タル由

七日、新霽、猶養痾、在布山、終日閑、賦新詩以遣興

吟節随意歩、小立路三叉、村巷断還續、野橋直又斜、緑揺風處

柳、紅露敷中花、瞥見鷺鷥下、魚苗上浅沙

右春郊偶成次韻

八日、晴、出官無事

九日、晴、出官

十日、晴、訪秦泉寺浅川生命飲、遂宿、夜雨

十一日、新霽、靄氣如陰、午後歸秦泉寺、觀陽山

十二日、晴、出官

十三日、晴、出官

十四日、晴、出官

十五日、暖、退衙、訪市川子文、不在、取路新地、訪介良西養二、途遇楠本生、夜命飲、醉眠、宿西氏、有歌忘却

十六日、夜來微雨、滯介良、午後拉西生觀花於舟岡、過利岡生、共俱吟哦衝口発、友凡五六名、頗有興

朝見ても夕ニ見ても山桜 あかぬは花の色香なりけり

十七日、晴、出官、無事

十八、晴、出官無事、草喻俗文、同僚丸岡生寄詩見調、云、喻文毎々煩先生、滅多弥八説文明、識否氣候自然妙、一時花発牡丹櫻、余即和云、灰吹欲喚先生、笑口歸來賛聖明、休道牡丹花小発、三遷依旧唱山櫻、山櫻歌鈴翁所詠、又和韻見寄、云、再説和魂実往生、又追宗忠證神明――

未後会陽山、講祓滌規則、聽徒凡二十人許

十九日、晴、出官

念、晴、出官、伊藤弘瀬田中三生、被命諭俗属官、晚帰

士族商人類繁生、家々張店は文明、賣文活業策尤下、可憐老太似  
残櫻

丸岡手代伴々當、奥參勘定尤發明、春田別有奇才在、吸江庵中坐  
看櫻

念一、晴、休暇、在布山不出

念二、晴、出官、晚過陽山、講大稜詞、聽徒數十人

念三、晴、出官

念四、晴、出官

念五、晴、出官

念六、晴、在布山、休暇

念七、晴、出官、改命戸籍社寺係、学校係被免

念八、雨、出官、晚過小龍画生托肖像、飲田中生、遂宿、是日、償

金九兩利一兩貳朱於藤崎氏皆濟、夜宿田中生家

念九、新晴、從新街出官

大晦、朝陰、已前雨、出官無事、夜衝雨帰布山、夜色昏黒、已近二  
更、是日得東京書信、偶成

眉根搔鼻ひることに吾妹子か おもふと我も思ひにそやれ 途中  
所得

(明治四年三月)

三月、小

朔、稍霽、風、休暇、在布山

二日、晴、出官、晚講書於陽山塾、聽徒殆三四十人、夜帰

三日、陰、午前拉小畑生適吸江庵、医師ホツシヤ不在、云昨之浪  
華、学医某、看電機於余肩、一時覺快、然未能全治、帰途迂路訪西  
養二不在、晚飲隣曲、夜雨蕭々

四日、雨、微恙、告官不出、終日臥看書、閑無事、健之入塾

五日、雨未歇、養病在家

六日、微雨、終日不歇、今日休暇、雇小松生塗竹輿

七日、寒雨蕭々、猶未晴、感冒、不出官、無事、草神武紀私講五六葉

八日、新霽、無事

九日、晴、暖甚、晚陰、出官、謀巡邑之事、退後訪弘田竹村氏、又訪田中生

十日、晴、麥寒、出官、写山口藩建白

十一日、晴、休暇

十二日、雨、微病

十三日、晴、出官

十四日、晴、出官、大工銀四朱、晚拉檢陽山

十五日、晴、出官、訂陽山古舎之價五十金、晚過潮江、醉歩新地、乘舟帰布山

十六日、晴、坂本横山二生之浪華、托書春日及関口氏、木村寿太來行禁厭、近隣婦女、多來請者、礼弟亦來、命飲、寿太被贈酒肴、晚

微陰、夜雨蕭々、蚊多

十七日、小雨、出官、健之告疾休、明日東行、告政廳、晚雨歇、過陽山塾、講鹿洞揭示、是日買陽山茶室及鞠所、價五十二金、托高橋生

十八日、陰、未牌発韌布山、從行者弘瀬・淺川・西・小松、及官僕銀太・信治、併余七名、駕竹篙至山田、宿一商家、夜会近村郷長村老惣組頭及神官等、諭告大旨、且示神官於祓除潔祭、前隣弘瀬等逆族招飲、沾醉

西野地やゐの、小溝の櫻花 青葉の比とはやなり二けり  
手一杯掬てすてけりけんけ島

戲ニ蓼原生ニ贈る

蓼原と聞けは中々辛さふな 甘ミをませて塩梅をせよ

十九日、稍霽、晏起、逆旅主人命別杯、辞不聽、酌一杯、発抵立田小憩、渡物川野市午飯、未前達赤岡、宿酒商、無事、午眠、看書遣消、夜蚊多、苦眠徹曉、雨蕭々、既有客況

一つ二ツ稀ニ飛かふ蚊ニさへも さはくや何のこゝろなるらむ

念、雨、終日不歇、朝集会、村吏数多、以農時遅刻第八時為期殆至午牌漸会、沿例申令於一庵寺中、人員殆五十名矣、未後発赤岡、衝雨到屋須郷、宿沿山惣組頭某家、逆旅主人好酒命杯、团欒沾醉、至夜分醉

眠、不知曉

思ひいて、や須のちきれ二契りてし 昔の夢の佛にたつ

松田島と云を過るとて

松田島松も疎ら二なり二けり 我見し妹は三齒くむらむ

念一日、新霽、会近村于郷長宅、凡四十名許、申令了発此、沿海抵手結浦、蟹舎蕭條、踰手結山、稍險、舎籬歩、山中開墾、松樹多伐、尽為兀山、下馳下坡、穿行松間、抵溝隍、水溢不可涉、迂路南海濱、郷導迎路、投宿於和食北村一農家、日已申後矣、浴後散步村巷、夜早寢

念四、雨猶不歇、午前集会山村村吏等、稀少纔不足十数人、未後発此、復取路於安田、渡安田川、行松間海濱、抵田野浦、投福田寺樋口克三郎家、主人少好学、多藏書、抽架上涉獵消遣、亦客中一適矣、夜被命飲、沾醉就寢、雨未歇

念二、罕晴、晏起、会傍近村吏三十七名許於恩城寺、午後発和食、拜坂本社于金岡山、神主常盤井巖云、近年神名始著、蓋宮地直躬所

念五、陰、会近村五處村吏凡五十余名、且讀且諭、小歇、又讀身滌規則、晚發此、宿奈半利、里正濱田氏、是日初聽子規一二聲 三百里さきに雲ありほと、す

考索云、其說精確無可疑、産土神宇佐八幡廟、在其東隣、扁額禮弟所書、常盤井生子某、嘗學書於吾弟、去歲病没可惜、取路沿山北道、歷赤野、踰八流、達安藝、投宿街北橋屋惣十郎家、蓋豪商也、家風最惇朴可賞、夜闌定北行、淺川弘瀬二生当北行、酌別杯、醉眠不覺曉雨点滴

念六日、新霽、朝詣多氣社、々人松田常太郎為郷導、老木森鬱、頗有古意、中古來併祀坂本社、今別祀和食金岡云、已後会里生等数十名、演諭告大意、里正等皆惘篤、能信受、招呼之外、会者数人、惣組頭恕平嗜雜書、多藏稗官小説、余借交易問答、午後発奈半利、沿灘行、路頗曉兀、時々棄輿歩、少憩加領郷野店、蟹舎櫛比、為小聚

念三、雨蕭々、午前沿例会集近村吏凡七十余名於明賛寺諭説、然時已近未牌、不能尽諸官技、可憾耳、喫午飯、即与弘淺二子別発、踰太山、午眠輿中不覺、抵安田、問小野惇助之事、輿夫云、已過数丁、北折入山間一里許、日間下、投宿清岡某家、里正某命飲、慰疲憊、沾醉適甚即眠、至夜分蚊多、寤不能寐、耿々達天明

落、巨室濱田某管轄此辺云、踰中山、險峻、又棄輿歩、抵羽浦午飯、時日將晡、薄暮稍達吉良川、宿一農家、疲憊甚矣、浴後早寢、涛聲憾枕、忽憶昔遊、屈指殆三十餘年矣、奉母將之江戸、嘉永甲寅大地震之秋也

吾妹児かたけてかきれしなげ島田 まけてふさとにやとりける哉

念七、晴、晏起、集村吏数十人、神職亦殆十人、此辺尤多神官、竹

崎某請献別杯、不甚辞、傾二三盞發、醉眠輿中百不省、過平等岬、飄兀夢醒、入元村、々吏來謁云、曾仕同宗家者、投宿於室津佐藤某、亦富商也、出示古書、有石川丈山、伊藤仁齋短冊、床上揭闌齋翁二行幅、頗可觀

廿八日、朝同宗猪惣次來訪、見贈生魚五尾、晚余亦訪猪惣於岩戸、雨暴到、遂宿命飲微醉、早寢、是日猪惣見示水底活火燈器假象、其奇功可駭、猪惣蓋驗諸碕陽洋客云、終宵雨聲、涛聲与豪、且眠且聽、極有客況

念九日、新霽、朝辞同宗家、将婦室津逆旅、途遇僕等來迎、即乘竹輿、復取路前路西帰、晚投宿奈半利農家、西・小松二生、別適柏木山中、蓋山村僻遠、不欲煩予、故別集会近傍諸村云、村農想平來訪、返前日所借交易問答、又來借安心小鏡

地中海ト西紅海トノ間、シユエスノ新掘割、十余年前ヨリ創業シテ、明治二八月ニ到テ成功ス、因テ欧ヨリ細ニ達スル船路、極テ便ヲ得タリ、日本横濱ヲ米ノサンフランシスコ迄、船路纔ニ廿日、サンフランシスコヲニユヨルクヘ新火輪東ヲ開キ、凡八昼夜ニシテ達ス、日本ヨリ英仏ニ行船路、三十八九日ナリ

(明治四年四月)

四月分

朔日、晴、早微寒、辰半後發奈半里、里正村老等來訪、過安田、訪

高松生、暫話直辞出、生送到市街、生前日喪義兄云、午後達安藝、投逆旅芙蓉肆、午睡半霎、閑無事、看書消遣、殆如書生行客、亦一適矣、晚山本生來訪、暫話移晷去、身濼規則刻本二十部、付郵筒送来、即賦与山本生等四五部

二日、夜來微雨至曉歇、微陰、朝發安藝、午飯和食驛吏家、未後達岸本、路微雨俄至、投酒商河本某、晚雨蕭々、想新鵲松魚  
初松魚山子規いつしかと 待し卯月の雨の夕くれ

三日、朝微雨、晏發岸本、入山間、曰王子、曰山南、山北、口西川、中西川、奥西川、穿峽行、雨時至、小憩奥西川、未半投蕪生野、是日新鵲處々啼

鳴ぬへき□□と思へはほととぎす 縁をわけて谷を出二けり

里正細木生見贈酒肴、滿醉

終夜蛙聲を枕にて 夢も結はぬ短夜溪の下地の空

なれもさハ妻や恋らん鳴蛙 おなし思の身ニ積る比

終夜蛙の聲ニ夢さめて あすの午睡につかむとそ思ふ

ほととぎす聞むとそ思ふ夕暮れニ 里の蛙のねたくも鳴らん

四日、微陰、晏起、猶潦滯此、午後集會十四五村里正等、人員極少矣、神官七人、晚齋來酒肴、余感冒、微醺即寢、雨益豪、徹夜不歇、有微熱、終夜煩惱

五日、稍霽、晏起、熱少解、已後詣葦生神社、神官有光貢等郷導為奉幣、觀神庫所藏古銅器、狀似鐘而少異、蓋數千年前外物、或云神代遺物、未詳為何物、決非梵鐘、神主亦不知所傳、又觀郷学校、偶細木繁蔵、々々一夜見示文稿一冊、有讀玉匡文、頗多議論、蓋亦里正之薨々者、午後会里正神官等、晚發此到大栃、薄暮抵白木野店、点炬火度蘿橋亦奇、夜投大栃里正小松某家

六日、猶滯在大栃、神官等來謁、無事、午後会村吏及神官等、凡集會者五六十人、昨日所会神官亦數輩來会、晚被命別杯、大醉早寢、有國雅亡矣

二三間聲ほり出すやほと、きす  
是日、与西・小松生別

七日、新霽、已牌發大栃、復度蘿橋、小憩白木小店、余頃日感冒  
さらぬたに風引し身の客衣　らすきの里と聞もくるしき  
午飯野尻、未後達楠目、投宿一卒族家、夜主人命杯、微醉早寢

八日、微雨、冒雨帰郷、官僕亦來、時日未午、被酒一眠、慰疲憊  
歸來て聞はうれしき子規　うき数にしもあらぬ客路も  
夜、無事

九日、晴、余感冒告官、掃除庭中、以微勞、丈八等六日帰郷云、晚  
亀六招飲

十日、陰、出官、告帰郷、午後雨至、未牌退食、過江口、一酌後冒雨來、夜無事

十一日、雨、終日不歇、晚招弘瀬・小松生飲、本山生來訪、日暮雨歇

十二日、新霽、出官

十三日、晴、出官

十四日、晴、発宿疾疴痛、告官、晚宮地生見訪、命飲且讀古神祇道、不覺疾在休

十五日、微陰、無事、臨米芾、以遣病魔

十六日、雨、養痾在蓐、覺微熱、頭岑々、不欲看書、夜風雨益豪

十七日、新霽、洪水、早曉健之還学館、熱頭痛甚、終日無聊、晚川田医生來訪、診予云、疾退大半

十八日、雨、無事、猶在蓐、晚暴風雨

十九日、雨、官脚発、付与児及吉良生書

念、雨、無事

大晦日、風雨、早起、豚兒出館

念一、雨、兒女輩觀劇、利国生見訪

(明治四年五月)

五月

念二、陰、無事、晚雨、西姪來訪、談時事

朔日、晴、朝利岡生見訪、示神奈川來翰、因詳近狀、晚試夏畦微勞、疲憊甚矣

念三、新霽、兒女婦來、健之亦來、是日祓除議被廢、余長大息

世のうさを歎<sup>中</sup>二つけてほと、きす しかし帰れとむ<sup>故</sup>へも啼也

二日、晴、無事、養痾不出

念四、晴、無事、淺川生來訪、田中生・小松・弘瀬生亦來會、命飲

三日、晴、無事、晚木村生來訪、為行禁壓、命飲、夜婦

談事、夜無事、小畑生婦自浪華、來訪

四日、雨、付書豚兒於本山生之東京

念五、夜來雨、小畑生宿、朝生咯血、午後丁野生來訪、談話移晷

五日、晴、暑酷、至九十三度、無事

去、草辦事書、晚稍霽

廿六、陰、無事、諸官休暇

六日、微陰、早適新地、拉兒女輩觀劇場終日、亦一適也、晚、晴、返家

念七、新霽、出官、辨祓除事於政廳、前議未決、廨舍又遷社寺局

七日、晴、出官無事、講鹿洞規于陽山義塾

念八、晴、出館、与少參乾氏論祓除事、晚過潮江、微醉夜歸

八日、晴、微痾在葺、無事

念九、晴、出官、辨於滌事下村權參事前

九日、微陰

十日、炎熱、早起出官、過岩崎少參事、晚歸布山

念一、雨、休暇、無事

十一日、炎威倍昨、休暇、長女輩又觀劇、余理園、終日無暇、薊野北代生來訪

念二、冒雨出館、晚歸亦雨

十二日、暑、早起出館、無事、晚過江口姪、夜宿、相携步郊北納涼

念三、新霽、役平内、伐惡竹叢木

くま川の月も隈なき夏の夜に おもふ友とちす、みするかな

念四、晴、朝霧大起、是日二宮神社祈禱、警衛從十二字、少時憩農

十三日、晴、出官、無事

家、喜代藏近重生亦先來、一時後、坐宮殿觀神事、人々恭肅、覺古風、晚歸

十四日、暑甚、告病歸臥、排遣

念五、暑甚、無事、夜從官檄來、云念七日、從八字至九字可出官

十五日、晴、暑氣倍酷

念六、炎熱覺倍昨日、尤閑無事、午睡以

十六日、晴、夜一雨驟然、万民歡喜可知

念七日、熱到八十七度、早出館、被命異宗教諭、岩崎少參亦蒙命、

十七日、陰、晚雨滂沱

一昨念五、朝官三員來、云外務省權大丞中野某、彈正臺少池巡察、外務西村史生

十八日、雨終日、夜風雨、入夜益豪

念八、炎威、早出官、訪中野權大丞

十九日、新霽、稍涼、行水祓除、出官

念九

念、晴、出官、無事、夜隣曲招飲

卅日、熱如火、早出官、与岩崎少參、訪外務省權大丞中野健明於北

奉公人街客舎、暫話移晷辞去、過竹村氏、返江口、掃布山

九日、雨、洪水殆満田

(明治四年六月)

六月分

朔旦、晴、炎威如昨、但覺早朝稍減熱、拮据多事、雇平内折薪

十日、雨、豫州賤女遭水難者來投、恤之為与飯食宿、云高府有類族、從弟渡部小源太、因聽川上洪水話

二日、晴、告官、草諭文、納涼於神殿、讀書午眠、驟雨一掃、涼氣可掬

十一日、雨、晚稍霽、午後蠻婢適府、予付添書於藤崎生、且与金一分

三日、新霽、未出官、猶草異宗教諭數條

十二日、新霽、淺川生來訪、談論移晷去

四日、晴、早出官、無事、弘田久助被命東行、退食後訪之、贈壹分金為贖、晚過潮江、夏賽微醺、一睡夜歸

十三日、霽、九字牌至陽山、会岩崎少參事、諭異宗徒、午辭歸、無事、夜月色奇明、逍遙水邊

石瀬川水を逆上る若香魚の 月にもおとる影の涼しさ

五日、晴、早朝白石漾生等東行、付漾生与書於豚兒付金拾五圓、草諭文不出、晚雷雨大至、稍生涼

十四日、晴、是日亡妻忌日、出官、出何書一套少參事乾氏、退食後過潮江、醺後臥涼榻上、夜歸途過藤崎生、又微飲、踏月歸、溽暑如蒸氣、不可眠、夜半驟雨一掃、稍覺涼

六日、休暇、無事、除蔓草

十五日、晴、告暇草諭文、暑甚困眠

七日、晴、腫瘡潰決、痛甚、因告官、中山生來訪、云十日登坂、因付書信、晚山本生來晤、晚驟雨暴至、点燈於土神

十六日、晴、暑甚、休暇、無事、時助生來訪、明日陽山行告延

八日、朝雨、後霽、是日土神賽祭

十七日、晴、出官、參政命諭徒人、与官屬議之、多端甚矣、晚驟雨

十八日、新霽、如秋風、草教諭文在家、夜阿鶴婦自府

十九日、小風雨、是日猶草諭文不出

念、猶雨、晚晴、書諭文、及請教典於官

念一、新霽、遊劇場、弟姪等亦在、都築生等也

念二、晴、出陽山

念三、晴、出官、晚訪林權大參事、暫話移晷、夜觀唐人街川原納涼、遂歸布山、夜已更矣

念四、炎威甚、在家草文、且刪式社考文、午後木邨寿太郎婦自備前、來過暫話、命酒飯、被贈土宜、岡山藩森下權小參事被贈書翰、云木村生信斯道頗篤志、冀被善遇之、蓋尹亦信此道者也、其所言稍可觀、是日官中有分課且陟黜

念五、夜來騷雨、是日頗有雨、溽暑亦甚、閱式社考、晚亡母公忌日、致祭典

念六、雨、休暇、是日夏越、祓除於産土神社、家人皆詣、晚雨稍霽

念七、新霽、適陽山、岩少參及宮地・山本皆不來、獨与吉川生召異

宗徒二人巨魁諭之、同宗弁馬來訪、午後歸臥、無事、収家産券十二石七斗三升、高十九石  
壹斗之内

念八、晴、出官、々脚発、急付一書豚兒

念九、晴、身滌祭、告暇

（明治四年七月）

七月分

朔日、殘炎如火、休暇、營家事、拮据匆忙、雇桶工七作、終日營繕、謙吉來宿

二日、晴、出官

三日、晴、暑甚、出官

四日、晴、出官、晚過林參政、暫話辭去

五日、晴、出官、晚歸

六日、休暇、兒女輩祭牽牛星、終日畏暑不出、潮江姪輩來

七日

八日、晴、会陽山、租税司来、允余所嘗請屢地、宮地嚴夫・吉川留七郎等来會、晚帰

九日、陰、出官、無事、晚過江口、買鮮晚酌、後拉妹姪等觀川原納涼、士女雜沓、諸雜劇所在頗多、應接殆不暇、夜又帰

十日、晴、賜告草諭文、潮江姪輩帰、長女亦共行、晚雨

十一日、晴、大工銀四雇、馬藏来、終日拮据勿々、葺炊屋杉皮九坪、取己杉、夜雨

十二日、新晴、会陽山異宗徒、諭告教旨、宮地・淺川・弘瀬・吉川生等也

十三日、晴、告草諭文

十四日、出官、過潮江及新町、吊市川子文、夜帰

十五日、雨、朝疝痛発、終日不已、擁衾臥、弘瀬・小松二生等来看

十六日、雨未歇、午後霽、健吉来、是日疝痛全愈、凭几草諭文排遣

十七日、晴、以微痾不行陽山

十八日、早出官、列會議席、從今日大属已上、會議藩廳、議諸官事、八步正米為皆正米

十九日、晴、出官

念日、出官、晚過田中生、夜帰、国券廢卜云令アリ

念一、秋爽

念二、早起、秋涼可掬

念三、晴、行妣公三年々祭、潮江江口親戚集會、凡十有四人、日晡客散

念四、晴、出官、朝過林參政許、聊論事、因示近事數條、晚退食、是日耶徒徒潮江廢寺

念五、晴、早起出官、無事

念六、雨、休暇、兒女微痾、予着蜩針

念七、晴、三男健之入官塾、早起會陽山諭宗徒、頑固殆如木石

七日、晴、會陽山、高橋・藤崎二生來

念八、晴、早出官、會衆議、々紙稅高法、晚過伊賀氏、不在、直辭  
過潮江、夜歸

八日、會議

念九、晴、晚雨、以脚瘡告官暇

九日、

大晦、晴、出官、無事、晚雨、衝雨歸

十日

（明治四年八月）

十一日

八月分

十二日、雨、終日微恙、告官不行陽山

朔旦新霽、昨脚子至自東京、收兒收書信、云七月十九日發、今在橫濱學校

十三日、猶養痾不出、火船着、云七月初發東京、甚晚

二日

十四日、在家、無事

三日

十五日、晴、出官、無事、晚雨、衝雨歸、得豚兒七月朔發橫濱修文館之書、是夜無月

四日

晴陰月の噂さハさて置て 秋最中かと云人もなし

五日

十六日、陰、休暇、無事、夜稍月明、藤崎・高橋二生來訪

六日

十七日、晴、一宮賽祭、賜告、無事、是日下婢來浪華、難波新地

人、適後免、乞診於小栗医生、乞散剂

十八日、雨、出官、會議、日野参政帰、臨會議席、演改革大旨、晩過訪弘田氏、帰布山、夜月色奇明

十九日、晴、会陽貴山、無事、是日下婢帰府、夜雨、涛聲高

廿日、雨、衝雨出官、無事、晩帰

念一、陰、休暇、二女輩適井口

念二、新霽、北風颯爽、始覺正氣候、会陽貴山、午後過潮江、訪林参政、不遇、投書及漫草辭去、宿江口、是日二女輩如井口

念三、早起、雨、出官、同僚等属官多罷、云遵 朝旨減省官員也、今日會議為之廢諸局蕭然

念四日、雨、衝雨出官、更拜戸籍社寺、諭俗兼命、与福岡精馬為同僚、是日福岡藤次亦出仕、蓋加大參事也、弘田男病死、送葬、夜宿江口

念五、出官、稟拜命印紙、濱田八束為小属、上等諸局多召返人、陽山囚徒來、理園菜

念六、賜告、晴、無事、社寺属官已下皆罷役、陽山異宗徒、理園、終日、二女輩帰、夜弘瀬・小松二生來話

念七、晴、秋風颯爽、冷氣襲人、行水滌、会陽山、下属皆見罷、未後帰、夜疝痛発、終夜不已

念八、晴、冷氣、終日在蓐、痛已、然腹拘攣未愈、異宗徒理園及宅地、無事

念九、晴、無事、告官休暇、養痾、終日不出

(明治四年九月)

九月分

朔旦、晴休暇、午後拉弘瀬生等適介良、訪西尾生、賽祭會客飲、微醺假睡、夜帰、田畝昏黒亦一適也

秋の野は尾花葛の葉女郎花 うらみくねりみ打招きつ、

二日、晴、不出官、灸背部、終日無事、是日兵隊土寇隊帰自東京

三日、晴、無事、夜來暴瀉數行、疲憊甚、困眠不出

四日、秋風颯々、冷氣襲人、起臥終日、看書為慰、遣二女等適府買物、夜無事、冷甚襲衣

五日、晴、冷氣甚襲衣、出官無事、晚訪西森及藤崎生婦

六日、微陰、無事、坂本五一見訪、禪話移刻去、稍快  
起臥おのかま、にて咲野菊 我占し野のかひにさりける

七日、微陰、適陽山、勉婦、豚児・謙之適井口及潮江

八日、雨蕭々、賽祭土産神、來賓少々、夜無事、朝乞葉十五帖

九日、新霽、無事、隣曲招飲、重陽白酒黃花

十日、晴、出官、晚過潮江、天神祭花鉢、士女雜沓、晚吊弘田氏葬  
送、夜帰、是日豚児書來、云八月十六日發横濱、池菅太郎帰省

十一日、晴、休暇、夜発疝痛

十二日、晴、猶微恙、不出陽山、遣三男健之于井口、約定林寺村貞  
吾為替米壹石六斗

十三日、雨蕭々、告官、囑東京書信於同僚福岡氏、聚書生講外史後  
北條氏

十四日、新霽、衝泥出官、復被命兼學校改革之事、晚訪教官小林雄

七郎、旅寓於農人街、夜帰

十五日、晴、曉瀉下数行、因告官、養病在蓐、終日無事

十六日、秋雨、猶在蓐、乞葉小栗謙造

十七日、雨蕭々、福岡参政伴來、有手書、云學校議案尤急

十八日、新霽、朝托野村又平上書及草稿福岡参政、秋山石工使人齋  
石碑二基、價八斗米、役夫立碑價二分云、豚児等來帰

十九日、晴、曉起女兒輩觀劇場於五臺山、予則乞診於小栗生、適後  
免町、過大桶、夜帰、神山大參事及同僚福岡生等書來

念日、晴、裁書答報大參事及同僚、且付往來乞診之事、托野村氏、  
午前池菅太郎來訪、暫話數刻、命飯酒、兒女等帰、夜允医往來之請

念一、晴、無事、朝為書生講外史、建吉來、頗有事故、因姑寄留

念二、晴、豚児等適潮江、禮弟來、是日外戚神賽祭、当家岩藏、晚  
招飲

念三、晴、力疾出官、与小林教官談事、示余草稿學制案、晚過潮

江、夜与禮弟聽新地劇音、宿潮江

甚

念四、晴、朝辭潮江、訪福岡大參事、晚歸途過陽貴山、吉川富七郎  
見訪

二日、晴、無事

念五、晴、無事、井口伴來云、竹村氏狂疾復發

三日、晴、無事

四日、晴

念六、晴、禮弟來談竹村氏事、藤井伴來、健吉婦、酒井等來訪、大  
工庄助亦來、遂償庫一所八十兩也、夜招飲高野生、夜半暴瀉數行

五日、晴

念七、新寒、下利數行、不出、弘瀨招飲不行、田中生來話

六日、陰寒、禮弟來、命飲、招隣人

念八、晴、寒、告官休暇

七日、霜霽、午後試步、夜歸、半夜復發疝痛、徹曉稍愈

念九、晴、無事、健吉來云、病狂甚、欲入牢、直辭去、適潮江、平  
内云、所借金期來月、因納金一圓、合金十圓、一割之約也

八日、雨、猶擁衾在蓐、晚霽、夜季兒學校有命可出席  
九日、晴、健之出學館、猶居第二級、晚歸

大晦日、陰、朝高橋保造來訪、云被命異宗徒教諭官、謙兒適後免請  
医、未後小栗医生來診、即處茴香劑五帖、晚又遣謙兒、夜大雨徹曉

十日、暖、稍快、遣季兒於高知、從今日至十六日賽祭、有事一宮、  
因賜官人告

(明治四年十月)

十月分

十一日、寒風、無事、買船適高知、西風甚急、訪藤崎生、遂過潮江

朔旦、朝雨、午後霽、養痾在蓐、覺稍愈、看書排遣、紺吉來話、暖

談事、又過江口宿

十二日、稍暖、過潮江囑事弟婦、聞箕浦氏未亡人、晚歸得詳聞、夜  
歸布山

十三日、暖、朝陰、午霽、役陽山徒二人運薪、健吉等之後免乞藥、  
囑為替米五石六斗於高島氏、戸長不肯、故止、夜雨

十四日、晴、無事、濱田八束伴来、見贈松魚節三、云一宮大祭為權  
宮司、夜八束見訪、命飲談話、竟宿、徹夜談到曉、甚適意、夜免職  
書来

十五日、晴、昨夜免職

奥宮周次郎

免第六等官大屬 除管祿

明治四辛未十月十四日

朝八束辭婦、囑大埔定林寺二村稅券、又付旧同僚免職稟狀于野村又  
平、夜雨

十六日、雨、無事、謙兒休暇、晚入塾

十七日、晴、無事、大埔從弟見訪、云券期念四日、夜吉之助来、約  
婚於齋藤氏、念三夜

十八日、晴、黎明有火川南、云百姓万平家、潮江姪来、傳弘田久助

書及小畑生書、今朝付書濱田八束、添一首

霜ハたひ老その森の下紅葉 しはし小春の光添へてよ  
是日又水瀉三四行、擁衾臥、畏新寒也

十九日、晴、無事

廿日、晴、寒甚、晚招飲松村戸長、話旧

廿一日、霜繁、寒度至冬至節

廿二日、陰、寒甚、雇隣女及馬藏、適与力町箕浦氏、前日約事也、  
惣次郎亦来、荷薪舂米、夜馬藏等婦、贈生魚五尾於齋藤氏、謙之  
来、明日之故也

廿三日、霜霽、買船往高知、親迎齋藤氏、伴安次也、晚樹下社賽  
日、散与飯於兒童、夜十字、婦与姊来、客散殆三更後、謙之淹滯

廿四日、霜霽、謙之往館、贈肴於竹村氏、往後免訪小栗医生、觀兒  
劇、夜婦

廿五日、晴、釣遊田部島堤上、不上竿、午後婦、晚安岡生等來訪、  
談話移晷、夜婦、健之婦、致弘田久助書、木村氏被贈鶏肉

十八日、晴、黎明有火川南、云百姓万平家、潮江姪来、傳弘田久助

廿六日、陰、無事、潮江縫兒來、晚歸、托弘久報書、定林寺工物壹石六斗、付旧婢

廿七日、風、寒、午後始發會陽山塾、書生七八名、為講靈魂且自由權二義

念八、朝釣遊、無事、往府、過田中氏及藤崎

念九、風埃、適府、過西森姪家、姪書偶束、俄想東遊、夜寒甚、宿江口、是日貸金五拾兩於藤崎氏、不在付其婦

(明治四年十一月)

十一月

朔日、無事

二日、會陽山、晚歸

三日、寒

四日、寒、役平内信治割薪、夜招飲、健之六日退塾、買猪肉炭二、一兩一分

五日、寒、健之入塾、又役平内等、平内午後從事、草書生規則

六日、晴、無事、禮弟來、役信治斯薪了、武平約役糯米三斗

七日、朝稍暖、午後西風、會生徒於陽山、七八名、晚冒風歸、寒威砭骨、被酒臥、告婚于戶長、客月念八

八日、寒、閑無事

九日、霜霽、稍暖、出府、訪箕浦氏、過潮江、夜訪弘田久助歸、巳八時半

十日、霜霽、暖甚、拉宮崎生、出遊東郊、觀瀑川、訪町医官於久礼田受診、豚兒等亦追來、健吉亦乞診、皆云無別異、稍向愈、病客雜沓、即辭還、是日霜霽、和暖如春遊適

十一日、晴、曉下利数行、荊婦兒女等往高智、晚齋藤楠馬來命飲飯、夜歸、是日下利殆十二三行

十二日、微飲、曉來亦下利数行

十三日、暖、痲痛、終日在蓐、点灸不愈、夜荊婦等歸

十四日、暖、無事、疾尚不已、或臥或起、健吉初出勤

十五日、曉来寒雨蕭々、痲痛未已、終日在蓐呻吟、宮崎生来訪、論時事、生適縣、豚兒乞藥小栗医生、晚雨益不歇

十六日、朝陰、豚乞藥小栗氏、午後雨岑々、健吉為隣曲人賽七觀音、在蓐呻吟、比昨覺稍弛

十七日、晴、是日大嘗會於一宮社、参政已下、皆有事祭場、從卯牌至巳牌事了、長女等詣之、既散云

十八日、晴、寒風、是日土神賽祭、家々祭典、詣神社為慶事、朝廷豐明節云、終日呻吟、在蓐不動

十九日、晴、無事、似稍張

廿日、霜威滿天、寒泣甚、謙之乞藥小栗生、煎劑五、散劑六、蓋甘汞劑歟、小松生来訪、亦勸汞劑、夜謙吉婦、請藥於德弘氏来、云有奇効

念一、繁霜如雪、曉瀉下二三行、痲依然、被衾臥、北岡儀之助来訪、云有鶴腸所含砂、可贈亦奇藥云、木村忠良来為祈攘事

念二、晴、無事、小栗生見診、云痲症幸無掀衝熱、可愈、投ホツアス劑去

念三、寒甚、無事、乞藥煎七、水一罍、北岡生来訪、齋来鶴沙

念四、寒、午暖、西岡生来、乞町醫師散劑八帖来、蓋ヒヨス劑也

念五、晴、無事、稍暖、是日稍覺病弛、夜宮崎辰吉・叔姪共来、云俄被命官吏、巡東郊、今夜直到赤岡、因命飲別去、夜陰曉雨蕭々、官府稍行黜陟

念六、新霽、暖甚、弟姪来訪、見惠鮮魚、蓐邊命飲、情話團欒、殆忘疾在体、晚辭去、夜微雨、大便秘二行後、滑便二行

念七、寒雨、謙兒乞藥町医生久礼田、散劑九帖

念八、晴、健吉適後免乞藥、水藥又換法、煎液ハ廢ス

念九、暖、無事、齋藤楠馬來

（明治四年十二月）

十二月朔

朔旦、陰寒、微雨、謙之適高知、学金九円先日文庫ニ納置、今日詮議スレトモ不見ト云、飯料之分也、健吉數ヲ斫り、悪木悪竹ヲ除ク、今日稍快方ヲ覺フ、云一昨日官船着、明後三日発ト、即書ヲ裁シ豚兒ニ贈ル、漾生ニ囑ス

二日、陰寒甚、謙之適公塾、健吉町医生ニ薬ヲ乞シム、水薬一罇、散劑九帖ナリ、塩辛熱物ヲ禁ス、蕎麦ハ佳ナリ、午後雨トナル、是日擁衾講事情於豚犬等

三日、新霽、四山戴雪、昨雨蓋皆雪也、是日稍快、授寒貝法於白石

氏

煉羊羹

一、小豆一升

一、沙糖四百匁

一、白カンテン三本

カンテン、能水ニ和シ煮ル、水七合入、其中沙糖入、解ケタル時、水囊ニテコシ、其中へ小豆シボリ粉入、ヨク／＼煮ル  
小豆、荒皮去様、濃アクニテ水入、皮黒クナル迄煮、水ニ流シ、鍋ヲ洗ヒ、二度程ユデ出シ、和ニナル迄煮、水ノウニテコシシホル

晚又喫蕎麦

四日、無事、稍快、終日看書排遣

五日、無事

六日、晴、食傷吐下、悪心暫時悩ム、夜無事、豚兎大桶へ行、蕎麦ヲ乞

七日、寒風、西岡生来、謙之久禮田江行、薬ヲ乞、今日ハ瀉下先ナシ、大桶從弟来訪、香物ヲ贈ラル、晚帰ル

八日、寒沍甚、釀雪、寒暖計至二十九度、比頃日殆下十二度、無事、擁炉看書為慰、夜瀉下止、淋瀝則依然、稍覺痛減

九日、寒猶昨、無事、松村・山本二生来訪、談話移晷去、健吉出勤、井口江帰ル

十日、晴、寒比昨朝稍弛、計上三十五度

十一日、晴、暖負暄、禮弟来訪、福富生亦来、云近日上京、因留命飲、半日餘坐談、是日稍覺快復

十二日、寒風、謙之乞薬楠、止散劑、水薬一罇

十三日、大寒威、釀雪、淋亦痛、夜尤甚、小水頻數、不能少眠、徹夜呻吟

十四日、寒倍昨、謙之適高知、釀雪、晚帰、稟金九圓、夜無事、痛稍弛、付書信東京

十五日、晴、寒氣稍弛、日中看書排遣、健吉適潮江、夜帰、鶴女詣

祈八幡社

十六日、寒威甚烈、漾生見訪、稟券價三十兩貳朱、金錢幣也、終日  
看書為慰、夜稍痛、小松生為製藥、汞劑也七厘強、三日服了

十七日、夜來雪、四山皚々、擁炉看書、且草拙著交際往來題人間交際往來一冊

松村生見訪、齋來先日所托写本来、薊野納所便來促稅、兵三郎來

春、謙之乞藥楠氏、水菓一饌

地八斗九升

一、米五斗八升七合也

宛り知

一、立八合

仲繼米

一、正卷升貳合

納所給

一、立七勺

祈禱一□

メ米六斗七合七勺

メ卷升貳合正

代百貳枚六メ二百五十文

此金拾兩貳分ト貳百五十文

十八日

右付兵三郎納薊野納所

十八日、晴、稍暖、禮弟來訪、暫話辭歸、云与弘田久助談健吉身  
事、是日痛未已、夜覺稍遠

十九日、晴、遣謙之於後免小栗氏、問藥料、云、五斗二升四合カ

湯散合百三十一貼 貼二四合ト云

水藥料貳朱拾切

念、晴、寒無事、健吉適府直歸、午前田村生來訪、稍話時事、移晷  
去、晚西養二亦來訪、被返經濟小学

念一、稍暖、無事、終日擁炉看書遣悶、友野生來話、被返書、謙吉

乞藥楠先生

念二、晴、無事、西郷物騒ノ風説アリ、佐川ノ奥、越智ノ処山ト云

辺ト云

念三、陰寒、無事、餅米洗、沢田未亡人來手傳

念四、陰寒、無事、看書排遣、兵三郎春米

念五、濱田八束見訪、云適松山縣官、寒風、謙之乞藥久禮田楠氏、  
并贈謝儀貳兩三分貳朱ト四百廿八文、菓七十二帖也、此日餅春、兵  
三郎老人、謙吉并沢田婆手傳、風呂立、是日節分除夕

念六、晴、午前縫兒來、云廿五日禮弟免職、縫一宿、今日立春

念七、晴、暖甚、兎輩皆伴縫兎適府、今日稍快行湯、藤崎并坂本等へ書遣ス、金策也、先二十両受取来、追而卅日ニ殘金受取筈、壹兩三分下駄健吉買、内6二兩遣ス、諸買物ス

念八、陰寒、是日稍快、遣謙之於後免、贈小栗医生謝儀金八圓壹朱、每葉一貼米四合之值也、夜寒雨、龜六來話、云今朝聽鶯聲、渠蓋既知春矣

念九、夜来有雨蕭然、暖氣如春雨、眠稍穩、蓆上看書排遣、紺吉來情人沓至、拮据勿皂、役健兎應接

大晦日、陰寒、拮据歲冗、余亦力疾辦家政債主之事、謙之適高知、集金於藤崎尚綱來、過一宮収坂本生、金合九圓云

参考史料、噺俗人間靈魂自由權利譯述

(明治四年三月八日)

(表紙)

「噺俗 人間靈魂自由權利譯述 単」

(表紙裏)

「易云、義ハ利ノ和ナリ、大学云、義ヲ以テ利トス

孔子云、放利而行多恨、孟子云、上下交征、利而國殆矣

又云、可欲謂之善ト、又云、無欲其不欲、此數語能く玩味シ

テ真味ヲ得レハ、思過半矣

「慥齋由識」

人間ニ固有ノ天性靈魂ト自主自由ノ權ヲ与ルト云訊

人間ニ限り、天神ヨリ不測ノ靈魂ト云ヲ賜ハリ、天地間ノ所有万物ヲ自由自在ニ我カ物トシ、其使役ニ供スルハ、今更云迄モナク、万古相カハラサル通義ナレトモ、或ハ時アツテ暴君汚吏ノ為メニ無理ニ拘束セラレ、又ハ自己愚昧無知ニヨリ、斯ク貴重ナル物ト云ヲ知ラス、往々自暴自棄シ、其中ニハ或ハ刑戮ニ罹リ不良ノ死ヲ致シ、或ハ不養生ニテ疾病ヲ以テ命ヲ殞ス事許多ナルハ、実ニ憐愍スヘキ極ナラスヤ、於是神聖ノ能アル人上ニ在テハ、万民ノ如此ヲ視ルニ忍ヒス、学校ヲ建テ邸ヲ立テコレヲ導キ誨ヘ諭シテ、元來人間タルモノハ、天地間ニ二ツトナキ、靈妙不測ノ貴重物ナルヲ知ラシメ、各々自然ニ備リタル、靈魂ヲ用ニ立シメ、知識ヲ開明シ、技藝ヲ研究セシメ、コレ迄一文不通一藝モテキ又ムタ物ヲ、有用貴重ノ調法モノトナスヲ教ユルハ、元々在上ノ人ノ天職ト云モノ、亦在上ノ人モソレ丈ノ得アリテ、大ニ利ヲ興ス本手トナルナリ、猶親ノ子ニ於ルカ如ク、ヨキ子ニ仕立ツレハ、ソレ丈家産ノ手傳ヲシテ、家富榮ルカ如シ、然ルニ後世ハ在上ノ人下民ニハ教ト云モノナク、親又子ニ教ユル事ナク、唯商家ノ番頭手代ヲ扱フ二心ヲ用ルノミニテ、是亦其教ト云ハナシ、扱其靈魂ト云モノハトノ様ノ物ニテ、今何処ニ住シテトノ様ノ面体ナルヤト細カニ尋ネ見ルヘシ、人々今日視モ聽クモ言フモ動クモ思フモ、皆何処カラスルヤラ、誰カサスルヤラ知

ラスニ、視ント思へハ直ニ目カ視、聽ント思へハ直ニ耳カ聽キ、言  
 ントスレハ早口ガ受取り、動カシトスレハ五体ガ動キ、考思フ事ハ  
 心ニ思慮スル杯、ヨク／＼省ミテモ見ルヘシ、実ニ不思議奇妙ナル  
 モノニ非スヤ、是必ス其本<sup>ツボ</sup>主人アリテ、コレヲ統ヘ司ルモノナ  
 クテ叶ハヌ筈ナリ、是所謂靈魂ニテ即天神ヨリ分チ賜ハリシ天性本  
 心ナリ、<sup>天性本心靈魂異名同物ナリ</sup>コノ靈魂ハ、凡ソ人間ト生レシ限りハ、知愚賢  
 不肖、貴賤男女ニカキラス、一同ニ完全無疵ナルモノハレトモ、凡  
 夫ノ浅間敷サハ、有生ノ初メヨリ惡癖仕習ハセニ引カサレ、幼稚  
 ノ<sup>二三才ヨリハヤ悪ク成ナリ</sup>時ヨリ知慧ヲ惡ク働カスルヨリ、忽惡知慧トナリテ、  
 漸々利口發明ト思フモノ、ヤガテ天性靈魂ノ疵トナリ、蔽トナルナ  
 リ、大人ハ赤子ノ心ヲ失ハスト云モ、此誠ノ大人ハ生レタチノ赤子  
 ノ靈魂ナリニテ無疵ニフトリタルモノ也、サレハ大人君子ナト云ハ  
 只本来ノ天性ヲ損セス産ノマ、ノ天良ヲ喪ハヌ事ニテ、更ニ増加ス  
 ル所アルニアラサル也、然ルニ赤子ニハ知識モ未タ開ケス、技能モ  
 未タ習ハス、只アツカリ坊ニテムゴ／＼シタル純粹物ナルヲ、コレ  
 ニ追々知識ヲ開ラキ藝能ヲ習ハセ、善キ児供ニ仕上ケ仕立ルハ親ノ  
 役ニテ、亦親ノ厄介ナリ、此ニ最モ大事ノ事アリ、何トナレハ其天  
 然ノ赤子ガソロ／＼成長スルニ從カヒ、天良ノ天性ヲハ何トモ思ハ  
 ス、親ニモ亦元來已モ此大事ニ氣カ付ス、只管利欲我慢ニテ成長シ  
 タル人物故、教ト云事モ導ト云事モセス、其儘ニサシ置テ、只明暮  
 早く知恵付テ独働ノ出来ル様ナレカシト思フノミニテ、幼稚ノ時ヨ  
 リハヤ惡癖ノ付クニ氣カ付ス、コノ児ハ利口モノシヤ、早カシコイ  
 ナト、小才覺ヲ教ヘ習ハセ、欲ト我慢ヲツノラセ、有度俣仕度俣ニ

喰セタリ買セタリアマヤカシ付上ラシテ、小児ヲチヤウラカシ、  
 折々態ト叱リテモ早児ノ方ニテ合点シテ何トモ思ハス、笑ヒ侮リ居  
 レハ可愛事ニ思ヒ、且祖父母ノ育テ秘藏スル孫ハ、猶更祖父母ヲ恃  
 ミ、横着我慢ニツノルヲ祖父母モ亦自慢シ、潜滋暗長スルモノハ惡  
 知慧ノミナリ、是凡人ノ常トハ云ヘト、幼児育養ノ法立タス、人間  
 ヲ教育スル事ヲ知ラヌニ坐スル也、上世ニハ胎教ト云事サヘアリ  
 テ、胎内ヨリ教誨ヲ仕込ト称スレトモ、ソレ程ノ事ナクトモ、少シ  
 物心付時分ニ惡習ヲ付ケヌ位ノ事有度モノ也、幼児ノ純良ニナキハ  
 大抵祖父母ノ手ニテ惡クスルト思フヘシ、諺ニ三ツ子ノ心七十疋ト  
 云ヘリ、又氏ヨリ育ト云、幼時ノ教育尤大事至極ナリ、人間ヲ教育  
 スルハ、三ツ子ニツ子ナトヨリ仕立仕入ヘシ、此事今世第一番ノ講  
 習研究スヘキ事ナレトモ、誰モソレ程ニ思ハヌハ、実ニ可怪事ニア  
 ラスヤ、此初劈頭ヨリ心ヲ用ヒ意ヲ尽シテ教育法ノ如クセハ、必ス  
 善良ノ児トナルヘシ、併シ此ニ大事アリ、天然ノ良心ヲ養育スル自  
 然法ヲ解セサレハ、或ハ無理強ニナリテ助長擡苗ノ弊害アルヘシ、  
 今時讀書家ニ幼少ヨリ讀書ヲセゲ付、五六才ニテ善讀書スルモノ出  
 來ルハ、アシキ事ニアラサレトモ、ヨクセネハ天然ヲ損ヒテ病身モ  
 ノニスル事アリ、幼児ハ猶更活潑々ノ生機ヲ長育シテ、流々スラク  
 トセサレハ必ス病ヲ生スヘシ、淺見安正カ子ヲ督責セシ如クニテ  
 ハ、宋人ノ苗ヨリモ甚シト云ヘシ、今幼童ヲヨク／＼天機ニ從フテ  
 天然ノ良心ヲ長進セシメントナラハ、遊戯ヲモ許スノミナラス、其  
 遊戯中ニ筋骨ヲ訓練スル事ヲ寓シ、不識不知心ニ勇ミ出來テ長進ス  
 ル様導クヘシ、洋人ノ学校ニ諸遊戯器ヲ設クルハ実ニ面白キ仕撰ナ

リ

儲成長ニ從ヒ段々修行ノ仕道ヲ替へ、ソノ器ヲ成就スルヲ期スヘシ、十二三ノ頃ヨリ人間ノ天性靈魂ト云フ事アルヲ自得セシメ、自棄自暴ニナラヌ様、第一自重自貴ノ物タルヲ對算ニテ知ラシムヘシ、事物ニハ段々手順手續ト云事アリテ、人間第一義ト第二義三義アル事モ童子ノ時ヨリ知ラセ、十四五ニナリテ屹度志立ツ英物ヲ見立、猶又第一義ノ一大事アル事ヲ折々云聞カセ羨シカラセ鼓舞振作スヘシ、千万人ノ人間ニハ必ス一二憤發興起スルモノ也、此事モトカク唱首ナケレハイカヌモノ也、明ニテ姚江ノ学ヲ主張セシ時、アレ程人物出来タルハ文成公ノ頼リニ良知ヲ提唱セシニヨルナリ、我皇國ニテモ江西ニ藤樹先生出テ、コノ学ヲ唱ヘシカハ一時人物出来、皆心眼ヲ付替タリト云ヘリ、天性靈魂ト云フ事、近時ハ却テ儒家ニテ沙汰ナク、洋学家修身学ヲ講スルヨリ折々噂スルヲ聞ケリ、洋人ハ靈魂ヲ大切カリテ、全世界ヲ手ニ入ルトモ、靈魂ニ疵付テコノ扶カリナクハ何ノ詮モナキ事ト云ヘリトソ、生洋学生ハ更ニ此等ノ事ヲ知ラス、只少々ノ利財貨種ノ事ニ氣ヲ奪ハレ、靈魂天性ト云辺ハハ程遠ク、或ハ心性ノ事ハ洋学ニ云ハヌ事也、迂愚ノ儒家者流ニ似タリナト賤シムハ、却テ洋人ノ深義ヲ知ラヌナリ、又迂儒ノ心性沙汰、性理学ナト号スルハ実ニ可厭ナリ、名目噂計聞覺ヘタリトモ何ノ益ナキノミナラス、却テ事實ニ害アル也、火ト云テ口ヲ焼カス、水ト云テ口ヲ潤サスト云ハスヤ、性シヤ氣シヤ心シヤト言躁キテモ、今日ノ受用ヲ知ラネハ生擊劔家ノ皆傳目六等ヲ講釈スルカ如シ、大ニ可笑事也、其天性靈魂ト云、名目噂ハ誰ニテモ知レタ事ニ

テ、別シテ講釈ニモ及ハヌ也、然ルニ今コレヲ掲クルニ至テ誰モ〳〵此道ノ仕癖ニナレテ其名義ヲ問ヒタカリ、ソレヲ詳カニ云時ハ早ソレニテ合点セシ顔ニナリ、一人モ自カラ内ニ省ミテ惕然警戒シ始テ驚キタル顔スルモノナシ、何トナレハ靈妙不測ト思ハス、知レタ事ト思ヒ居ル故也、コレ能〳〵物ヲ考ヘス所謂甘草丸吞ニスルカラナリ、且コノ位ノ事ハ聞カテモ何モカマハス、用ノ欠ケヌト思ヒ、自分スメニスメ切タル料簡アル故ナリ、是無始ヨリ已来ノ習氣ナリ、古人コレヲ按牛頭喫草ト云ヘリ、又犬モヤトヘハ糞ヲ喰ハヌト云コレ也、ヨク〳〵思ヒ考ヘテモ見ルヘシ、人ニ天神ヨリ賜ハリシ天性靈魂アリト云事ヲフト氣付テヨリ、扱モ〳〵不思議ナル結構ナル物哉ト思ヒミレハ、一日片時モ其恩頼ヲ匱相ニ思ヒ輕蔑侮弄スル事出来ズ、実ニ勿体ナル事ニテ、コレヨリ自暴自棄ノ念モイツシカ消失セ、自勵自強勉強ノ力モ付クモノナリ

儲又其天性靈魂ニヨリテ勉強スルニ、無理牽合ニネチスクメルカト云フニ、全ク左ニ非ス、其性魂ニサカラハス、其下知ニ從フテヤレハ、尤モ自由自在、面白ク屈退ナキモノナリ、コレヲ名付テ亦人間自主自由ノ權ヲ与フト云ナリ、此事更ニ牽合附会ニ非ス、イヨ〳〵如此アルヘキ筈ノ天然自有ノモノ也、抑自主自由ト云ハ、近事洋学家ノ云出シタル言ニテ、昔ハ聞カサリシト云モノアリ、大ニ不然、古今皆ヨク云事ニテ、ソレト氣ノ付カヌハ餘リ自由ナル故也、夫自主自由ノ四字ヲ委ク訳スヘシ、英語ニ「リベルチ」ト云ハ、先自主自在ト云義ニテ、漢訳ニコレヲ自主トモ自專トモ自得トモ自若自主宰任意寛容従容ナトノ字ヲ当テタルヨリ出テ、元初ハ天性本心靈魂

ノ條理ヨリ縁ヲ引テ云言ナリ、訳家云自由トハ一身ノ好ムマ、ニ事ヲ為シテ、窮屈ナル思ナキヲ云、古人ノ語ニ一身ヲ自由ニシテ自カラ守ルハ万人ニ具ハリタル天性ニテ、人情ニ近ケレハ家財富貴ヲ保ツヨリモ重キ事ナリト、○又上ヨリ下ヘ許シ、コノ事ヲ為テモ差ツカヘナシト云事也、譬ヘハ読書手習ヲ終リ、遊ヒテモヨシト教師ヨリ子供ヘ許シ、公用了テ役所ヲ退キテモヨシト上官ヨリ許サル、等ノ事也、又御免ノ場所、御免ノ勸化、殺生御免ノ川ナト云御免ノ字ニモ当レリ、又好悪<sup>スキカラ</sup>ノ十分ニテキルト云義ニテ危キ事ヲモ犯シ、為ネハナラヌ、心ニ思ハヌ事ヲモ扞テ行ネハナラヌナト、心苦シキ事ノナキ趣意ナリ、故ニ政事ノ自由ト云ヘハ、其国ノ住人ヘ天道自然ノ通義ヲ行ハシメテ、邪魔ヲセヌ事也、開板ノ自由ト云ヘハ、何等ノ書ニテモ板行勝手次第ト書中ノ事柄ヲ各メサル事也、宗旨ノ自由トハ、何宗ニテモ人々ノ信仰スル所ノ宗旨ニ帰依セシムル也、千七百七十年代並米利加騷乱ノ時、巫人ハ自由ノ為メニ戦フト云ヒ、我ニ自由ヲ与フルカ、否ナレハ死ヲ与ヘヨト唱ヘシモ、英国ノ暴政ニ苦シム余リ、民ヲ塗炭ニ救ヒ、一國ヲ不羈独立ノ自由ニセント死ヲ以テ誓ヒシ也、當時有名ノ「フランキン」ト云人云、我身ハ居ニ常処ナシ、自由ノ存スル所即我居ナリト、皆天然自中ノ條理ヨリ云詞ニテ、決シテ我儘放蕩逸興ノ趣意ニ非ス、他ヲ害シ私ヲ利スルノ義ニ非ス、唯心身ノ働ヲ逞シテ人々互ニ相妨ケス、以テ一身ノ幸福ヲ致スヲ云ナリ、自由ト我儘トハ動モスレハ其義ヲ誤リ易シ、又權ト云ハ其人々当然ニ所持スル筈ノ利ナリ、又求ムヘキ理、為スヘキ当然ト云事也、譬ヘハ借錢ハ払フヘキ当然ナレハ、コレヲ催促ス

ルハ銀主ノ權ナリ、又証文榎ナレハ何方ヘテモ出テ言拔テ、獨立不羈束縛ナキ自由自在ナル筈ノ道理ナリ、コレヲ惣シテ人間ノ自主自由ノ權ト云テ、是亦天帝ヨリ御許ヲ受テ来リ、天下晴レテノ權利ナリ、コレヲ人間ノ公欲ト云、交際上ノ通義、蛮夷ニ行テモサシ構ナキハコノ一事ナリ、コレヲ孔子ハ言忠信行篤教則雖適夷狄不可棄ト云ヘリ、是人間ノ第一義ナリ

辛未春三月八日、有所感録、時久霖新霽、蜩声初發、頗覺欠呻、午眠、晦堂老人自識